

年代別で大切なこと

幼 児 期

幼児期は、「トラブル回避」を最優先にし、「できた」という感覚を積み重ねることを大切にしてください。気になることがあると、「みんなと同じように」「苦手なことを早いうちに克服させたい」という気持ちが出てくるかもしれません。しかし、苦手なことを繰り返し練習させすぎると、お子さんは「できないこと」ばかりに向き合うことになり、自信を失うきっかけにもなります。

この時期は、お子さんが好きなこと、得意なことをのびのびとやれる環境を整えてあげてください。また、困った時に周りの大人に頼って上手くいったという経験も、将来の大きな力になります。

幼児期の支援は、できないことへの訓練よりも周りの大人が「お子さんに合った関わり方を一緒に見つけていくこと」が重要です。支援機関とつながることは、お子さんのためだけでなく、ご家族が将来を見据え、心にゆとりを持って子育てに向き合うためにも大切です。

▲ 幼稚園・保育園・こども園の生活の特徴

- 集団の中で過ごす
(家とは違う音や騒がしさ、音楽、たくさんの人、様々な匂いなどに触れる)
- 家とは違う給食やおやつ
- 一斉の指示で活動が進む(「みんな〇〇しましょう」という声かけで動く場面が多い)
- 順番を待つ／譲り合う／一緒に使うなどのルールを学ぶ
- 日課や活動が決まっているが、行事などで変わることもある
- 行事などで、みんなと同じように振る舞う必要がある
- 自由遊びの時間がある(何をするか自分で決める／友だちと関わる)
- 「ことば」でのやりとりが増える(先生への相談や報告、友だちとの会話など)

園では、家庭とは全く違う環境の中で過ごし、集団での生活が基本になります。その環境が、神経発達症のあるお子さんにとっては困りごとにつながる場合があります。

年代別で大切なこと

▲ この時期に起こりやすいこと

一
例

- 他の子に比べて言葉の習得が遅い／話し方が幼い
- かんしゃくが強い／気持ちの切り替えが難しい
- 寝つきが悪い／何度も起きてしまい睡眠リズムが安定しない
- 一人で遊ぶことが多い／他の子の輪の中に入らない
- 自分の好きな話を、相手に関係なく話し続ける
- 言葉の役割の取り違え(物を渡す時に「ちょうだい」と言ってしまうなど)
- 朝の支度や道順などが変わると気持ちが乱れる
- 大きな音や特定の感触を極端に嫌がる
- おもちゃで遊ぶより、並べることに熱中する

困りごとへの対応

▲ 早めに関わり方を工夫する

- 伝わりやすい声かけの仕方やお子さんが安心できる環境を整える
- 「わかってもらえた」「できた」という経験を増やす
- 余計な負担を減らし、本来の力を伸ばしやすくする

医療機関の受診には時間がかかる場合があります。診断がなくても相談・支援は受けられます。少しでも気になることや困っている症状があれば、まず相談をしましょう。

家族の関わり方

神経発達症について

お子さんの育ちが気になる方、 健診等で気になると言われた方へ

「気になる」と言われると不安になるかもしれませんが。発達には個人差があり、1～2歳の時期は神経発達症かどうかの判断が難しいこともあります。しかし、「様子を見よう」で終わりにせず、心配なことがあればぜひ地域の保健センターや、子育て支援の窓口にご相談をしてみてください。早い時期からお子さんの特性に合った関わりを始めることで、持っている力が引き出されやすくなる事がわかっています。

相談先を知りたい

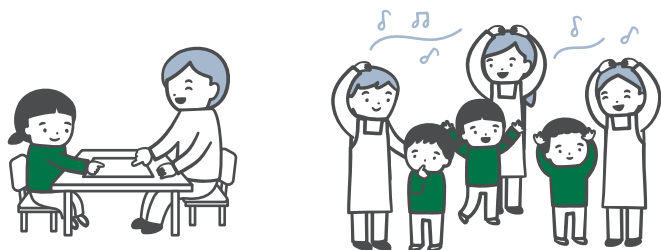
▲ 療育ってなに？

療育とは、お子さんの育ちのコツやヒントを見つける支援のことです。療育機関はそのヒントを専門的に探る場所であり、周りの子と同じことができるようになるための施設ではありません。療育機関でお子さんに合う関わり方や環境の作り方を一緒に考え、家庭で実践していくことが何よりも大切です。

神経発達症の特性が目立ちにくい場合でも、困りごとが小さいとは限りません。診断を待たずに、困りごとや関わり方についての相談は始められます。まずは親御さん自身が少しでも安心し、楽になることから始めましょう。

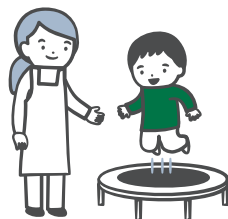
その療育機関がどんなことを大切に、どんなことに取り組んでいるか、実際に見学して決めていきましょう。

★神経発達症についての詳しい説明はP.40をご覧ください。



見学する時のポイント

- その療育機関が大事にしていること
- 家庭で続けられる形で、家族への具体的な説明や提案はあるか
- 子どもの得意なことを伸ばしてくれるか
- 家庭での困りごとなどの相談にのってくれそうか



▲ 安心して通える学びの場を見つけるために

- どこなら子どもが安心して過ごせるかを考える
- 「学校で楽しく過ごす」と「学びの環境」の両方を大切にする
- これまでの園での様子や配慮事項をまとめておく
- 地域の「就学相談」に行くなど、早めに情報を集める
- 可能であれば本人も一緒に学校見学に行き、話し合う

小学校での学びの選択肢

通常学級

先生一人に対して多人数で、集団生活が基本。個別対応は学校によって差が大きく、児童同士の支え合いや育ち合いが重視されます。

通級による指導

通常学級に在籍しながら、週に数時間、別室や別の学校で個別指導を受けます。

特別支援学級

少人数で、個別の支援計画に基づいた指導を受けます。大人との安心できる個別の関わりが重視されます。

特別支援学校

障害や困難の程度に応じた専門的な教育を受けます。

学校や地域で制度のバラツキが大きいので、お子さんの特性や困りごと、本人の気持ち、地域の状況等から考えていきましょう。

相談窓口(各市町村の教育委員会等)

自治体によって異なりますが、入学の半年～2年ほど前からの準備や申請が必要になる場合が多いです。地域の小学校でも相談ができ、市町村で「就学相談」も行っています。お住まいの市町村の教育委員会から情報収集をしてみましょう。

お住まいの市町村 教育委員会 



岡山県
特別支援教育
就学ガイド

年代別で大切なこと

困りごとへの対応

家族の関わり方

神経発達症について

相談先を知りたい

小学生

年代別で大切なこと

困りごとへの対応

家族の関わり方

神経発達症について

相談先を知りたい

小学校時代は、お子さんに合ったやり方で「自分にもできる」という手ごたえを積み重ねていく時期です。

小学校に入ると、生活や学習、友だちとの関係など、求められることが一気に増えます。大切なのは、お子さんに合ったやり方を一緒に見つけ、周囲のサポートも借りながら、できる形に工夫して取り組んでいくことです。小さな成功でも、本人が「できた」と感じられることが、その先の生活を支える力になります。

身支度、食事、持ち物の管理などの生活習慣は、みんなと同じやり方である必要はありません。「自分なりのやり方」で安定してできることを目指しましょう。また、困った時に周りの大人に「助けて」と言い、上手にいった、という経験はとても大切です。人に頼ることは社会の中で生きていくための大事な力です。

一方で、危険なことや人間関係での最低限守るべき社会のルールをきちんと教えることも、この時期の大切な役割です。ルールは、曖昧なまま「空気を読んで」ではなく、具体的に分かりやすく伝えるようにしましょう。お子さんと話し合い納得の上で決めることが、お子さんが自分から守ろうとする意欲につながります。

▲ 幼児期と学齢期の環境の違い

幼児期

- 身の回りのことは親がケアする
- 大人の目が届く範囲で遊ぶ
- 困ったことはすぐに大人が対応
- 生活スキルが中心

学齢期

- 徐々に自分ですることが求められる
- 大人の目が届かない時間が増える
- 人との関係の作り方が変化する
- 自分で対処をする必要が増える
- 学習への態度や成果が求められる

▲ この時期に起こりやすいこと

一 例

- 登校しぶり、非常に疲れた様子、腹痛や頭痛の訴えがある
- 忘れ物や失くし物が増える／気が散りやすい
- 授業についていけない／先生の指示を聞いて動けない
- 読み・書き・計算など、特定の領域が難しい
- グループ活動や話し合いについていけない
- いじめや人間関係のトラブル(被害者・加害者)
- 「なぜ自分だけ上手くいかないのか」と感じ始める など

▲ 対応のポイント

■ 達成感がある体験を増やす

周りの人と同じことができることを目指すのではなく、人より秀でたものでなくてもお子さんの得意・好きなことを見つけ、「できた」「楽しい」「嬉しい」と感じられる体験を増やしましょう。

■ 話を聞いて一緒に考える

お子さんが困ったことや問題を話してくれた時は、まずは本人の話にしっかり耳を傾けてください。周囲から見ると独特であっても、本人なりの理由や理屈があります。きちんと聞いた上で、「じゃあどうしたらいいか」を一緒に考えましょう。すぐに解決できなくても、分かってもらえたという体験は本人に残ります。

■ 子どもの気持ちを大切に、合意を得る

何をやるにしても、お子さんの気持ちを尊重し「この子に合う形」を考えましょう。親子で話し合うことで、お子さんが困った時に周りへ「助けて」と言える力や、意見をすり合わせて納得し合う経験を積み重ねていきましょう。

相談窓口

- 神経発達症の専門相談窓口 …… P.58
- 教育関係の相談窓口 …… P.61
- 市町村の神経発達症の相談窓口 … P.59
- 本人が利用できる相談窓口 … P.63

中学生以降

中学生以降は、心と身体の変化が大きく、「自分はどうかありたいか」を考え始める時期です。自分の気持ちや悩みを上手く言葉にできず、イライラして、不安を感じやすくなるため、早めに相談できる手段を確保しておくことが大切です。

この時期のキーワードは「支援付き試行錯誤※」です。命の危険や金銭トラブル、法的な問題などの大きな事態は防ぐ必要がありますが、本人の自己決定を基本にして、現実的な範囲でやりたいことに挑戦させましょう。当然上手いかないこともあります。失敗は悪いことではありません。自分のことを自分で決め、失敗から学び、現実と折り合いをつけていく体験が何より大切です。そのために、親の役割も変えていく必要があります。先回りして正解を教えるのではなく、試行錯誤する本人を陰ながら支える「黒子」になるイメージです。失敗を責めるのではなく、本人がそこから学べるようにサポートしましょう。

※信州大学の本田秀夫先生の言葉です。

▲ この時期に起こりやすいこと

人間関係・コミュニケーション〈一例〉

- グループやクラスのノリについていけず、浮いてしまう
- 知らない内に相手を怒らせてしまい、トラブルになる
- 冗談や皮肉がわからず、からかいやいじめの対象になる
- 部活の上下関係や暗黙のルールがわからない

生活・心身の不調〈一例〉

- 計画的な勉強ができない／勉強について行けない
- ゲームやSNSに没頭してやめられない
- 朝起きられず、昼夜逆転してしまう
- 将来や人間関係についての不安／気分の落ち込み

- 感情のコントロールができず、爆発してしまう
 - 不登校や学校への行きづらさ
 - 約束やルールが守れず、トラブルになる
- ★具体的な困りごとへの対応はP.13をご覧ください。

▲ 対応のポイント

■ 「自己決定」を尊重する

危険なことや法的な問題がなければ、本人がやりたいことには現実的な範囲で挑戦させてみましょう。上手いかなくても、本人の納得につながり、自分を理解する手がかりにもなります。

■ 専門家や支援機関とのつながりを切らない

医療機関も含め、子どもから大人への支援へ移っていく時期です。継続した支援があると、社会参加につながりやすいことがわかっています。「もう大きくなったから」と支援を切らず、相談先とのつながりを持ち続けられるよう、専門家と相談してください。

▲ この時期の親の役割

本人の興味ややりたいことは、親御さんが願う「こうあってほしい」こととは違いかもかもしれません。しかし、この時期の親の役割は、子どもの試行錯誤を見届ける「黒子」のような存在です。ハラハラしながらも見守るのは、手を出すこと以上に大変かもしれません。失敗することもあります。本人を責めず、次はどうするかを一緒に話し合えることが大切です。



相談窓口

- 神経発達症の専門相談窓口 …… P.58
- こころの健康相談窓口 …… P.62
- 市町村の神経発達症の相談窓口 … P.59
- 本人が利用できる相談窓口 … P.63
- 就労関係の相談窓口 …… P.62

自立 について

保護者の方へ

自立についてどのようなイメージをお持ちでしょうか？

自立とは何でも一人で行うことではありません。自分の得意なことや苦手なことを理解し、人や制度の力を借りて、助けてもらうことが大切です。これは生活でも仕事でも、すべての場面に当てはまります。

自立の手段の一つとして、仕事をどうしていくのか、どのように収入を得ていくかを考えていく必要があります。特別な才能を使って社会で活躍している人はごく一部です。「親のやらせたいこと」と「子どものやりたいこと」は違います。大事なことは、本人ができることを見極め、心身の健康が守られるような働き方をすることです。少しずつ情報収集や相談をしながら、本人や専門家と話し合っていきましょう。



中高生のみなさんへ

「この人なら」と思える人を見つけよう

中学生や高校生になると、「自分でなんとかしなきゃ」と思うことが増えてきませんか？しかし、どんな大人でも、すべてを一人でできる人はいません。困った時に「助けて」と言えることは、とても大切な力です。「こんなこと相談していいのかな」と思わなくても大丈夫。話を聞いてくれる人が一人でもいると、それだけであなたの力になります。それは家族かもしれないし、友だち、趣味の仲間、先生かもしれません。「この人なら、ありのままの自分でいられる」と思える人を、あせらずゆっくり探していきましょう。